

第 13 回

日本医師会

赤い賞

かかりつけ医たちの奮闘

受賞者紹介



日本医師会

赤ひげ大賞

目 次

- 3 第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要
- 4 祝辞 内閣総理大臣 石破 茂
- 5 主催者挨拶 日本医師会 会長 松本 吉郎
- 6 主催者挨拶 産経新聞社 代表取締役社長 近藤 哲司
- 7 協賛社挨拶 太陽生命保険 代表取締役社長 副島 直樹
- 8 祝辞 厚生労働大臣 福岡 資麿
- 9 表彰式・レセプションの様子
- 10 選考委員コメント

受賞者紹介 (順列は北から)

- 11 中村 伸一 (福井県 おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長)
- 16 早川 富博 (愛知県 愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院 名誉院長)
- 21 中村 正廣 (大阪府 中村クリニック 理事長)
- 26 高垣 有作 (和歌山県 国保すさみ病院 顧問)
- 31 間部 正子 (熊本県 間部病院 副院長)
- 36 赤ひげ功労賞 受賞者
- 38 選考経過報告 日本医師会 常任理事 黒瀬 巖
- 39 第14回「日本医師会 赤ひげ大賞」推薦概要

(肩書きは2025年2月21日現在)



第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」概要

「赤ひげ大賞」は、日本医師会と産経新聞社が主催し、「地域の医療現場で長年にわたり、健康を中心に地域住民の生活を支えている医師にスポットを当てて顕彰すること」を目的として、厚生労働省の後援の下、平成24年に創設（第6回より太陽生命保険が特別協賛）されました。各都道府県医師会から候補者を推薦していただき、選考委員の厳正な協議を経て、第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」の大賞5名と、功労賞14名の受賞が決定しました。

主 催 日本医師会、産経新聞社

後 援 厚生労働省

協 力 都道府県医師会

特別協賛 太陽生命保険

対 象 者 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。

推薦方法 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦

選考委員 羽毛田信吾（恩賜財団母子愛育会会長）

向井 千秋（東京理科大学特任副学長）

檀 ふみ（俳優）

ロバート キャンベル（早稲田大学特命教授）

森光 敬子（厚生労働省医政局長）

医 学 生（和歌山県立医科大学・琉球大学／令和6年度）

城守 国斗（日本医師会常任理事）

黒瀬 巖（日本医師会常任理事）

羽成 哲郎（産経新聞社取締役）

河合 雅司（産経新聞客員論説委員）

（肩書きは2025年2月21日現在）

内閣総理大臣 石破 茂



本日、栄えある「日本医師会 赤ひげ大賞」および「赤ひげ功労賞」を受賞された先生方、誠におめでとうございます。

今から何年前のことか忘れましたが、日本の医療、国民皆保険は制度ができたときと今とでは随分と変質をした、ということが書いてある書籍を読んだ記憶がございます。国民皆保険制度ができたときは、結核に代表される感染症、あるいは労働災害が対象でございました。ある意味、国民が等しくリスクを負っていたというべきものかもしれません。今やがん、あるいは生活習慣病、あるいは認知症のように疾病の種類が変わってまいりましたので、みんなが等しくリスクを共有していた時代とは、医療というものは変わってくるのだろう、そしてまた「治す医療」から「治し、支える医療」へと変わっていくのだろうと思っております。

受賞された皆様方は、地域に根付き、長年にわたり住民の皆さまの生活を医療の面で支えてこられた方々であります。

「赤ひげ診療譚」は山本周五郎の昭和30年代の小説です。昔、三船敏郎と加山雄三が主演の映画を見た気がします。江戸時代のことです。三船敏郎扮する小石川療養所の医者と、長崎で医学を学んで正義感に燃える若い加山雄三演じる医者が色々なやり取りをするという内容だったと記憶しております。

そこでこういうやり取りがございます。赤ひげがこういうことを言う。「現在われわれにできることで、まずやらなければならないことは、貧困と無知に対する闘いだ。貧困と無知とに勝っていくことで、医術の不足を補うほかはない」と。「それは政治の問題ではないか」と若いお医者さんは思うのですね。赤ひげはこう答えます。「それは政治の問題だと言うだろう、誰でもそう言って済ましている、だがこれまでかつて政治が貧困や無知に対して何かしたことがあるか、貧困だけに限ってもいい、江戸開府この方でさえ幾千百となく法令が出た、しかしその中に、人間を貧困のままにして置いてはならない、という箇条が一度でも示された例があるか」と。

何か、どこかの時代の話だろうかと思うようなことですが、いつの時代も医療というものと、政治というものはそういうものなのかもしれません。

日本人の医療リテラシーは高くないという指摘もあります。ある調査では、お医者様の言っていることが理解できていると回答した人の割合が、日本は他国よりも低いそうです。なぜかという、高校に保健体育という学科はあるのですが、大学の入試に出ないので、誰も勉強しない、こういうことが本当にあっていいんでしょうかと思ったことがあります。

赤ひげの先生方、それぞれの地域で医療に貢献しておられる先生方は、本当に人々の安心、頼みの綱であり、心のよりどころであります。私は医者ものの小説は結構好きで、もう亡くなりましたが、渡辺淳一さんの小説も随分読みました。初期の作品の「無影燈」に、若く正義感に燃える医者と、ベテラン医者との対話がございます。日本における医学教育というのは一体何なんだろうかと、本当に納得した治療、納得した人生の終わり方、そういうことを考えねばならないのではないか、というような場面があったことをよく覚えております。

やはり人々にとって、医術だけではなく、人生すべてをかけたパートナーというのがお医者様であり、本日の表彰を受けられた先生方だと思っております。

医学はこれから先も進歩していくでしょう。私は昔、厚生労働の仕事をやったことがあるのですが、「名医という言葉があるうちは、医学は科学ではない」と教わったことがございます。そして、新型コロナウイルスへの対応では、本当に良心的に、一生懸命やられた方ほど疲弊したということは、私はなかったとは申しません。

21世紀は感染症の世紀だと言う方がおります。我々は未踏の世界に生きていかなければなりません。そして80年後には、日本の人口が半分になるとの推計もあります。こうした時代において、医療の持続可能性を維持していかなければなりません。日本の医療の在り方につきましても、今回の受賞を機に、先生方にご教授を賜りたいと考えているところでございます。

いずれにいたしましても、今回受賞された先生方は、医学者、医術者としてだけではなく、人間として素晴らしい方々です。「あの先生がいてよかった」と、どれだけ大勢の人たちが思ったことか。その存在は何物にも代え難いものだと思っております。受賞を心からお慶び申し上げますとともに、選考に当たられました先生方と、主催されました日本医師会の皆様方に、心から感謝と御礼を申し上げまして、ご挨拶といたします。

日本医師会 会長 松本 吉郎



日本医師会会長の松本吉郎でございます。

本日ここに、ご来賓の石破茂内閣総理大臣を始め、多くの皆様のご出席の下、第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」の表彰式を遂行させていただきますことを心より感謝申し上げます。

本賞は、各地域に根付き、その地域の住民に寄り添いながら、医療現場で地道にご尽力されておられる先生方の活動にスポットを当て、その功労を顕彰したいとの思いで平成24年に創設したのですが、このたびで13回目を迎えることができました。

昨年の能登半島地震のように、大きな災害が頻発する日本において、地域の復興の要は、いつでも頼れる医療機関、そして安心して相談できる医師の存在です。平時においてはあまり意識されませんが、日本全国どこにおいても、昼夜を分かたず対応してくださっている医師がいることで、地域が支えられているのだと改めて思います。

今回の受賞者である5名の「赤ひげ大賞」の先生方、そして14名の「赤ひげ功労賞」の先生方はいずれも、地道に、そして献身的に医療活動に従事してこられました。先生の顔を見るだけで元気が出るような、医療を超えた患者さんとの信頼関係の中で地域を守ってこられたことに敬意を表します。また、ICTを活用したり、地域住民や行政、多職種とのネットワークを形成するなど、限られた資源の中でも持続可能な医療の仕組みづくりに取り組んで頂いていることを心強く感じます。

2025年は、日本の経済成長を牽引してきた団塊世代が全員75歳以上となり、約5人に1人が後期高齢者の社会となります。住み慣れた地域で健やかに暮らし続けられるよう、医師はまちづくりの一翼も担っています。

日本医師会としても引き続き、これらの活動を支えることで、地域医療の充実に寄与して参りたいと思います。

結びとなりますが、改めまして、ご協力頂きました都道府県医師会の皆様に感謝いたしますとともに、共催の産経新聞社、ご後援の厚生労働省、特別協賛頂きました太陽生命保険株式会社を始め、本事業の実施にご尽力頂きました方々に、心より御礼申し上げます、私からのあいさつとさせていただきます。

受賞者の先生方、本日は誠にありがとうございました。

産経新聞社 代表取締役社長 近藤 哲司



「赤ひげ大賞」ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

今年は5名の先生方を「赤ひげ大賞」に、14名の先生方を「赤ひげ功労賞」に決定いたしました。いずれの受賞者も地域に深く根ざし、住民の健康な生活を支えてこられた方ばかりで、まさに「現代の赤ひげ先生」の名前にふさわしいご活躍をされています。

平成24年に創設された「赤ひげ大賞」は、今年で13回目を迎えました。地域住民のかかりつけ医として日々奮闘されている皆様に、心から敬意を表します。また、その活動を支えてこられたご家族の皆様にもお祝いを申し上げます。

わが国では「2025年問題」という言葉が多くの業界で聞かれますが、医療の分野も例外ではありません。超高齢社会が進み、医療や介護を必要とする層が加速度的に増える一方で、それを担う医療従事者、介護従事者の不足はますます顕著になっています。人手の問題にとどまらず、医療費や介護費の増大、社会保障制度の持続可能性の確保なども社会的な課題として突きつけられています。

患者から求められる医療の内容も多様化しています。病院で病^{やまい}を治すことはもちろん、健康に暮らし、その人らしく生きていける時間をいかに長くできるかは、人生100年時代における医療の命題ともいえるものです。実際、医師が手がける医療内容は、従来の外来や訪問診療から、病気を未然に防ぐ勉強会、看取り、ときに地域住民の相談にまで広がっています。都市部、山間部を問わず、かかりつけ医による「寄り添う医療」がますます求められています。

今回、赤ひげ大賞、功労賞を受賞されたのは、まさにその最前線で活躍を続けておられる方々です。これまでのご努力に心よりの敬意を表すとともに、日本のより良い医療の実現のため、一層のご尽力をお願い申し上げます。

そして、皆様の高い志は次の世代に引き継がれなければなりません。赤ひげ大賞の選考委員会に医学生が参加しているのは、若い世代に先生方の仕事ぶりに触れてほしいという願いからでもあります。この賞を通じ未来の赤ひげ先生が生まれることを心から願っています。

私ども産経新聞社も、紙面での提言やイベントの開催などを精力的に展開し、日本の医療の充実、さらには国民の長寿と健康的な暮らしの一助となるべく、これまで以上に力を尽くしていく所存です。

結びになりますが、「赤ひげ大賞」開催にあたり、ご協力をいただきました厚生労働省、選考委員をはじめとする関係各位、特別協賛をいただいた太陽生命保険株式会社に、厚く御礼を申し上げます。受賞者の皆様、誠におめでとうございます。

太陽生命保険 代表取締役社長 副島 直樹



「赤ひげ大賞」を受賞された5名の皆様、ならびに「赤ひげ功労賞」を受賞された皆様、誠におめでとうございます。

今回受賞された5名の先生方は、地域の人々が安心して毎日を暮らしていけるよう、長年にわたりひたむきに尽力されてきた先生ばかりです。地域で生活する人々に寄り添い、支え、命と向き合ってこられた先生方の姿勢に感銘を受けるとともに深く敬意を表します。

当社では、社会課題の解決という保険会社の責務を全うすべく、確実に保険金をお支払いするという従来の役割だけでなく、疾病の予防と保障が一体となった商品の提供を通じて、お客様の健康増進をサポートするという新たな役割にも取り組んでいます。

人生100歳時代においては、「元気に長生き」することが重要であり、そのためには疾病の「治療」だけでなく、病気の兆候を早期発見するなどの「予防」への取り組みが欠かせません。地域住民に寄り添い、適切な治療だけでなく予防にまで携わる先生方のように、当社もお客様に寄り添い、疾病を予防し、お客様が元気で生き生きと暮らしていけるようサポートするために、早期発見に役立つサービスをご案内しています。今後とも、お客様の安心で豊かな暮らしを支える保険会社となるために、更なる取り組みを進めていきます。

創業以来、長年にわたりご家庭に寄り添ってきた保険会社として、2017年より地域に密着して人々の健康を支える「かかりつけ医」である医師の先生方の功績をたたえ、特別協賛させていただいています。「赤ひげ大賞」をより多くの方々に知ってもらうことで、地域医療の充実や理解促進につなげていければという思いで、これからも応援を続けていきたいと思っています。

最後になりますが、当社はこれからも地域で献身的な医療に取り組む赤ひげ先生と同じように、多くの方々の「元気・長生き」をサポートするため、商品やサービスの充実を図ってまいります。また、全国各地の赤ひげ先生の益々のご活躍を心より祈念申し上げます。

厚生労働大臣 福岡 資麿



この度、栄えある「赤ひげ大賞」を受賞された5名の方々及び「赤ひげ功労賞」を受賞された14名の方々に對し、心からお祝いを申し上げますとともに、長年にわたり、地域に寄り添い、住民の健康を支え続けてこられたことに對し、心からの感謝と深い敬意を表します。

「日本医師会 赤ひげ大賞」は、地域に根差した「かかりつけ医」として、生命の誕生から看取りまで、病を診るだけではなく、予防や健康増進も含めて献身的な活動をされている医師の功績を表彰し、地域医療の大切さを広めるものです。

受賞者の皆様におかれましては、住民の診療と健康確保に日夜取り組んでこられたと伺っており、住民の健康を守るという強い使命感と行動力により、地域医療が支えられ、今日まで育まれたと改めて実感しております。

医療を巡っては、現在、人材確保、物価高騰、医療需要の急激な変化といった厳しい状況の中で、医療現場の皆様にご尽力をいただいているところです。厚生労働省では、こうした目下の課題に對し、まずは、緊急的な支援のための補正予算の措置を早期に執行してまいります。

一方、将来に目を転じ、2040年頃を見据えると、医療・介護の複合ニーズを抱える高齢者の増大や、現役世代の減少、また、これに伴う在宅医療の需要や高齢者の救急搬送の増加が見込まれています。

こうした中で、来年度からは、「かかりつけ医機能報告制度」が開始されます。今回受賞された皆様や関係者の皆様のご協力を賜りつつ、地域ごとの取り組みの推進に努めてまいります。

さらに、在宅医療などを含め、医療全体をカバーする「新たな地域医療構想」を策定し、あわせて医師偏在対策や医療DXを推進するため、関係法案を国会に提出しました。関係者の皆様のご協力を賜りながら、より良い医療を目指して取り組みを進めてまいります。

最後になりますが、本事業を支えてこられた日本医師会及び産経新聞社を始めとする関係者の方々に改めて敬意を表するとともに、本日出席の皆様方のご健勝とご多幸を祈念いたしまして、私の挨拶といたします。



赤いひげ大賞受賞者の記念写真



表彰式で石破茂首相から祝辞が述べられた



表彰式で表彰状を受けとる受賞者



レセプションでは歓談の輪が広がった



レセプションで受賞者と御懇談される秋篠宮皇嗣同妃両殿下

第13回 赤ひげ大賞選考委員コメント



羽毛田 信吾 委員 恩賜財団母子愛育会会長

地域医療への情熱、地域に寄り添う姿勢について、自分の実感を重視して評価した。地道な努力に頭が下がる思いで、この賞により、若い医師が続いてくれる契機になればと思う。



向井 千秋 委員 東京理科大学特任副学長

長年にわたり地域住民に寄り添うという従来の視点だけでなく、新たな技術を導入して地域住民の健康に寄与する医師など、新たな「現代の赤ひげ」像を示せたのではないかな。



檀 ふみ 委員 俳優

どの先生も地域に合った取り組みをしており、評価に迷った。個人的には地域を巻き込んだ取り組みをしているかに着目した。推薦される方の平均年齢も下がっており、若い先生に地方でさらに活躍してほしい。



ロバート キャンベル 委員 早稲田大学特命教授

今回の受賞者は、一医師だけでなく、役場やITの専門家らと組んで成果を上げた先生など、限られた医療資源の中、他の地域のモデルになるような新たな形を示してくれた。



森光 敬子 委員 厚生労働省医政局長

選考は困難を極めたが、先生方一人一人の献身的な取り組みが地域医療を支えているのだと改めて感じた。90代の受賞者もあり、医療行政に携わる者として身の引き締まる思いだ。



医学生 和歌山県立医科大学・琉球大学/令和6年度

● 地域と連携しシステムを構築する先生たちの姿に触れ、医師の仕事は医療だけでなくと知った。そういった志をつないでいける医師になりたい。

(和歌山県立医科大学)

● 選考を通じ、地域医療に何が求められているかや、地域への向き合い方を知り大変勉強になった。今後目指す医師像を探るきっかけになった。

(琉球大学)

医療・保健・福祉の一体化と多職種連携

おおい町国民健康保険名田庄診療所 所長

中村 伸一

〈 福井県 〉



(川村寧撮影)

なかむら・しんいち おおい町国民健康保険名田庄診療所所長。昭和38年、福井県三国町(現・坂井市)生まれ。62歳。平成元年、自治医大卒。3年、名田庄村(現・おおい町)国民健康保険診療所所長。福井県立病院外科(医長)勤務を経て10年に再び同診療所所長。11年4月から「あっとほ〜むいきいき館」のジェネラルマネージャーを兼務。

ドライブスルー方式で発熱して飲食できなくなった高齢女性を新型コロナウイルス感染症と診断し、診察室に戻って中核病院に入院するための紹介状を書いたかと思えば、今度はくるぶしに褥瘡^{じよくそう}のある高齢男性を診察。薬を塗りながら「うんこ色しとるけど、これがよう効くんや」。付き添いの娘さんは「いつも笑わせてくれるわ」と笑顔だ。

そうこうしているうちに、新型コロナ感染の女性の紹介状の準備が整い、診療所前に。クルマのドアを開けて「また元気になって戻ってきてよ」と大きな声で見送った。

次は健康診断で便に潜血があったという男性の内視鏡検査だ。ポリープを見つけ「あった、あった。これや」と患者に声を掛ける。「これなら心配ない。内視鏡で取れる。きょう検査してよ

かったよ。ほんとによかった」とまた大きな声が診療所に響く。

男性の内視鏡治療のための紹介状を作成していると、訪問診療に出かける時間を少し過ぎてしまった。すぐにクルマに乗り込みハンドルを握る。10分ほどで、車いすを使い一人暮らしをしている高齢女性宅へ。脈や血圧を確認し「今のペースで、ほどほどに」と食事や服薬の指導をすると、携帯電話が鳴った。

在宅酸素療法を受けている男性が調子を崩して入院を望んでいるとの連絡だった。訪問看護師から状況を詳しく聞き取り、一度診療所に戻って中核病院への紹介状をつくることにし、入院の調整を進める方針とした。

「効率的に良い医療を受けさせることが最も大



診て、触れて、治す。地区ただ一人の医師として多忙を極める

切。そのために、病状を良く知っている患者本人や看護師の意見を尊重してコーディネーターに徹することもある。なんでも出しゃばっていけばいいというものでもない」という。

名田庄診療所のある福井県おおい町名田庄地区（旧名田庄村）の人口は2000人余り。高齢化率は40%を超える。そこにただ一人の医師として勤務する。使えるものは何でも使うし、頼れるときは頼る。すべては患者のためだ。



大病院と違い「自分のやったことが、どう役立っているのかよく分かる」

地域に愛される「ドロクター」

診療所に赴任したのは平成3年。当時28歳だった。頼れる人はいないと思っていた。だが「ベテランの患者さんは、若い医師が不安なのをよく知っている。豊富な人生経験を生かして育ててくれた」。

当時を振り返ると生意気だったという。「ちょっととんがっていて、人に突っかかって論破したりし

てね」。地域の人たちは、そんなドクターに「やんちゃ」を意味する方言「どろくた」をひっかけて「ドロクター」とあだ名を付けた。土地の習慣を教えてくれたり、育てた野菜を持たせてくれたり。「ちやほやはしないけれど、大切にしてくれた」

地域の人たちは無医地区になった時期も経験し、医師を手放したくないという思いも強かったのかもしれない。「伸びしろがあるという期待」を感じながら、地域に溶け込んでいった。

ただ順風満帆だったわけではない。忘れられない誤診がある。嘔吐とひどい肩こりを訴える女性を往診して、くも膜下出血を疑ってはみたが、肩こりの対処だけで帰ってしまった。その直後に命が危ぶまれる局面に至り、呼び出された。やはりくも膜下出血だった。

救急搬送し、祈る思いで専門医に託し、呆然として病院の出口に向かったとき親族とばったり出会った。厳しく責められることを覚悟した。



訪問診療先で、腰を落とし、患者と同じ目線でやさしく話しかける

だが、掛けられたのはねぎらいの言葉だった。「何回も呼び出して悪かった。どんなに一生懸命やっても人は間違ふことがある。お互いさまや」

幸い女性は後遺症もなく回復した。この「出来事」などを機に「赦された人間は人を赦さなくてはならない。赦せる人にならなくては」と思い至ったという。成長したドクターは「育ててくれたこの村に残ろう」と決心した。

「辞めんといて」に引き止められ

現在は、診療所で地域医療の研修医を受け入れる一方で、日本専門医機構のワーキンググループで総合診療専門研修の制度設計に携わるなど後進の育成にも力を注ぐ。ただ、地域医療の道を志す若者は多くない。「大きな病院で経験を積む

ことや、専門的な道に進みたがるのはよく分かる」と話す。

しかし、大病院では経験できないことができる、ともいう。「自分でやったことが、どんな風に役立っているのがよく分かる。私はここに赴任して1、2年でハマりましたね」

ただし責任は重く、何度か辞めたいと思ったこともある。だが、そのたびに「不思議なことに、引き留める何かが起きる」のだという。

例えばある鬱病患者^{うつ}を巡っての出来事。時間をかけて診察してきたが、手に負えず精神科に紹介した。しかし、患者はその後、自死を選んだ。死体検案も任され、相当に「キツイ」思いをした。

「自分は間違っていたのか。しかし、あのまま自分が診ていても良くなったかどうか」。ここを去るかどうか、医師を続けるべきかどうか思い悩んだ。

そんな時、患者の家族が「先生、こんなことで、辞めんといて」。誰よりもつらいはずの患者の家族の絞り出すような訴え。受け止め、応えないわけにはいかなかった。

医療だけでは守れない

診療所は平成11年、介護や子育て支援のほか料理教室といった文化活動の拠点にもなる保健医療福祉総合施設「あっとほ〜むいきいき館」に一体化した。行政、地域住民を巻き込んで、アイデアを詰め込んだ施設。誰でも気軽に来られるよう入り口からの動線、受付の位置にまでこだわった。開放的なつくりで、どこで誰が何をしているのか互

いに見えるのが特長だ。

自身は同館のジェネラルマネージャーと診療所所長を兼務し、病気の予防から治療、介護まで一体で取り組む。こうした施設は当時珍しく、視察を受け入れることも多かったという。今では同様の施設が各地で徐々に増えている。健康と安定した生活は「医療だけでは守れない」との考えは、どこであって共通するのだろうか。

「ここは元気なうちからみんなが通って交流する場所。年を重ねるとどんな風に生活が変わっていくのか、若い世代も日常的に見ておくことが大事」と語る。目指すのは「親と子、孫と一緒に暮らす大きな家の再現」だ。

(糸博之)



「あっとほ〜むいきいき館」の玄関前で。同館のジェネラルマネージャーと診療所所長を兼務する

医療・介護のネットワーク構築で在宅療養支援

愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院 名誉院長

早川 富博

〈 愛知県 〉



(南雲都撮影)

はやかわ・とみひろ 愛知県厚生農業協同組合連合会足助病院名誉院長。昭和26年、愛知県安城市生まれ。73歳。50年、名古屋市立大医学部を卒業後、内科医として勤務。51年、足助病院に赴任した。その後、名古屋市厚生院、名古屋市立大医学部などを経て、平成8年、足助病院の内科部長に着任。10年に同院病院長となった。31年から現職。

紅葉の名所「香嵐溪」^{こうらんけい}があることでも知られる愛知県豊田市足助地区。観光地としての顔を持つ一方、65歳以上が人口（約7千人）の約4割を占める。独居高齢者や老夫婦だけの世帯も多く、住居は山中にも点在する。そんな地域で内科医として四半世紀以上、患者と向き合ってきた。

年の瀬が迫った昨年12月、看護師とともに車で向かったのは、山中にある古い民家だった。到着するとベッドにいる高齢の男性患者の状態を丹念に診察。男性を介護する妻から伝えられる体調の変化、抱えている不安にも、じっくりと耳を傾けた。

「よし大丈夫。無事に正月が迎えられそうだね」。診察を終えてほほえむと、男性と妻は、ほっとした表情を浮かべた。

73歳となった今も、診療に奔走する日々を送る。受賞に「私のような者がいただいていいのかという

思い」と恐縮するが、「地域の人たちが受け入れてきてくれたことで今がある」と語る。

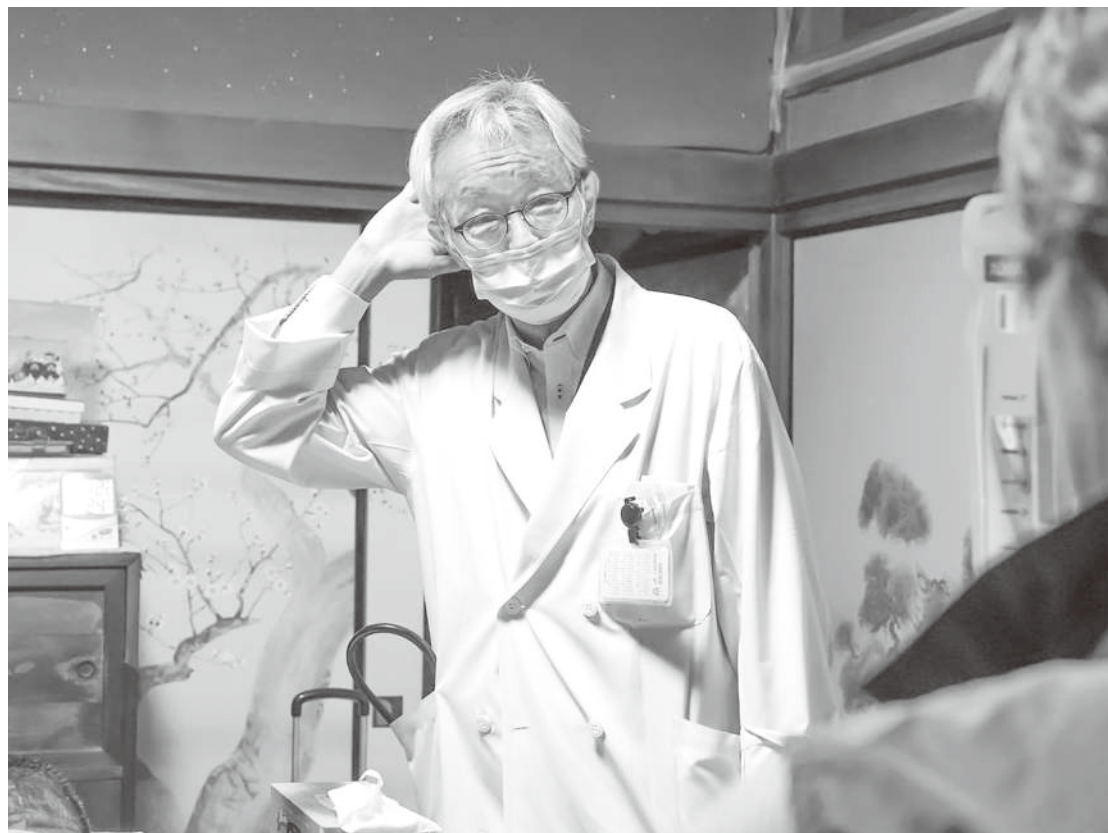
「愛着ではなく、愛している」。地域への思いは強く、そして深い。

「駆け出し」からの絆

大学医学部を卒業後間もなく、研修医として赴任したのが足助病院だった。

当時は約200床を医師10人ほどで診る忙しさ。先輩医師たちは、厳しさと愛情を持って指導してくれた。「午後の外来前の空き時間には、先輩手づくりのコートでテニスを教えてもらうこともあった」と懐かしむ。純朴な地域住民の温かさにも日々励まされ、伸び伸びとした新人時代を送った。

その後、大学病院などで臨床と研究に没頭。足



訪問診療先で患者や家族にやさしく寄り添う

助病院でともに働いた先輩医師から誘われ、内科部長として同病院に戻ってきたのは平成8年、45歳の時だった。

「十数年経ても、地域には、変わらない人の良さがあった」が、変化も起きていた。地域からは若者が流出し、一人暮らしや夫婦2人の高齢世帯が目立つようになっていた。

老々介護の問題も顕在化。良質な医療・介護サービスの提供が求められていたが、山間地域という地理的要因や移動手段の悩みもあり、通院などに困難をきたしている高齢者も少なくなかった。

赴任早々に訪問診療の体制強化に乗り出したが、病院から遠く離れた山中に暮らす患者もあり、1日に回れる訪問先には限界があった。地域を回る介護人材の創出、医療と介護の連携強化は喫緊の課題だった。

どうすれば、限られた人材で質の高いサービスを提供していけるのか。自らも講師となる勉強会を開き、ケアマネジャーやヘルパーの育成に力を入れた。情報技術（IT）を現場で積極的に活用していく必要性も提唱。医療・介護スタッフらが患者情報を共有していけるシステムの構築に尽力し、平成15年に電子カルテの導入に踏み切った。

厚生労働省の調査では、一般病院における電子カルテの普及率は平成20年時点で14.2%。先駆的な取り組みは、スムーズな業務の遂行に役立った。

健康寿命の延伸を

先端医療へのアクセスに困難も予想される過疎地域においては、重症化予防のみならず、体と心の状態を守りながら健康寿命を延伸させる「仕組みづくり」が重要になると考えてきた。

長年の住民健診から得られたデータを解析し、高齢者の筋力維持などに有効な体操を考案。足助病院で開かれる健康教室などで活用している。ほかにも、院内では「歌謡教室」「男の料理教室」といったユニークな教室も開催。参加者たちには



地域について「愛着ではなく、愛している」ときっぱり言う

笑顔が弾ける。

ヒューマンネットワークづくりにも力を入れ、平成22年には医療や保健、福祉、介護の関係者、行政や住民らが集まって地域課題などを話し合う研究会を設立。一人暮らしの高齢者の見守り、病院などへの搬送支援など、支え合いの活動を進めてきた。

体も心も診る

精力的な活動を支えるエネルギーは、どこからくるのか。「動いていないと弱ってしまう。私はカツオやマグロみたいなものだから」。笑顔でおどけるが、医師としての揺るぎない信念は本物だ。

取材中は少し落ち着かない様子で、取材場所となった病院の会議室と外来を行ったり来たり。取材前、診療した患者の体調が気になっているという。

「若い先生たちに電話で『ちょっとお願い』といえど済む話なのだろうけれど、患者さんのもとに行って診ないことには話は進まない。電話で済ますということはしたくない」

患者の不安に寄り添い、適切な治療につなげる「もうちょっとのやさしさ、もう一步のやさしさ」を大切にする姿に、間近で接する病院のスタッフも厚い信頼を寄せる。

「体だけでなく、心も診てくれる先生」。看護助手の小沢悦子さん(62)は、顔をほころばせる。体



病院に併設されたデイサービス施設で利用者と笑顔で話す

の心配から生活の困りごとまで、患者からは日々、さまざまな相談が寄せられるが「じっくりと聞いて、解決策を探ってあげている」と、尊敬のまなごしを向ける。

70歳を前にした令和元年、電力小売りをを行う地域新電力会社「三河の山里コミュニティパワー（MYパワー）」を設立した。

新会社では、買い取った電力を地域の公共施設や事業所などに販売。利益の一部を地域の課題解決などに活用している。

これまで形づくってきた医療などを持続可能なものとしていくには、行政の補助金頼みでは限界がある。電気代として地域外へ流出していたお金を

を地域内で循環・消費させるための「新たな一手」だ。エネルギーの地産地消を目指し、太陽光など電源開発にも取り組んでいる。

「人口がさらに減っていけば、税収は増加しなくなる。なんでも行政頼みではなく、自分たちの地域は自分たちでなんとかする、という発想をもたなくては」

医療、地域の困りごとにも耳を澄ませる日々。「何かとやりたいことは次々と思いつく」と、アイデアは尽きることはないようだ。

「これからも皆さんの力を借りながら、取り組んでいきたい」。挑戦は続く。

（三宅陽子）



病院のスタッフと気さくに語り合う

在宅医療体制の充実、多世代交流の「まちづくり」

中村クリニック 理事長

中村 正廣

〈大阪府〉



(川村寧撮影)

なかむら・まさひろ 中村クリニック理事長。昭和23年、大阪市生まれ。76歳。52年、昭和大医学部卒業後、大阪大医学部で学位取得。同大医学部附属病院や東大阪市立中央病院などで勤務し、平成8年に開業した。20～24年に大阪府医師会調査委員会委員長を務めたほか、東成区医師会では理事や会長を歴任。30年からは東成区医師会名誉会長。

大阪城から南東に約2キロ、大阪メトロ中央線・緑橋駅から徒歩3分の距離にあり、スーパーマーケットや公園などからもほど近い「中村クリニック」。都会に位置する好立地な医院の敷地内には、「24時間365日見守る」とうたう介護付き有料老人ホームがある。

「フェース・トゥ・フェースの関係を築いているからこそ、『ちょっと元気がないかも』という変化にも気づけるようになるんです」。毎昼食時にはここで入居者と交流することが日課で、医師人生の大半をここ大阪市東成区で過ごしてきた。

その間、地元医師会の医師や看護師らが職種の垣根を越えて連携を深め、医療を医療機関のみで完結させない仕組みづくりに奔走。そして自らもこのホームの、そして地域の“灯台守”として温かく患者に寄り添ってきた。

患者に尽くす 父の姿、原点に

中村クリニックの前身は、父が開業していた24時間体制の中核病院「中村外科」。自身がまだ小学生のころ、父は胆道癌のため46歳という若さで亡くなった。

医療について語り合うことこそなかったが、それでも「遺してくれたもの」は大きかった。尊敬と感謝の念を持ち、患者のために休まず尽くす父の姿はおぼろげながら記憶に残り続

け、その後自らも医師を目指す原動力となった。

父は空挺落下傘部隊の従軍医でもあった。武器を持たず衛生道具だけを携えて戦地に赴いて生還。その後「恩返しをしたい」と、仲間とともに高野山に部隊の墓を建てたことを伝え聞いた。

「自らの命を縮めてでも患者さんのために尽くした父の思いは、消えていない気がするんです」。



患者とはフェース・トゥ・フェースの関係を大切にする

住み慣れた街で、自分らしく

「家に帰った一人暮らしの患者さんは誰が面倒を見るのか」。今でこそ在宅医療、地域医療の先駆者的存在として最前線を走るが、長い道のりはそんな問いから始まった。

市民病院などで消化器外科の勤務医として約20年間勤めた。当時は「第一線で医療を続けたい」とメスを持っていたというのが、そんなころ、今も強く記憶に刻まれる患者と出会う。紹介状を持って手術を受けに訪れた、胃がんの高齢男性。術後何とか家へ帰せる状態になったが、2週間後に

再び会ったとき、男性は歩けないほど弱った状態だった。

患者の男性は一人暮らし。術後に男性をケアできる人がおらず、退院後の生活まで考えが及んでいなかった。「病気を診るよりも、生活を診るフォローアップが必要だ」。そんな思いが出発点となり、開業のきっかけにもなった。

平成8年に父の病院跡地で開業。介護保険制度の始まる年には、時間外でもいつでも対応できるよう敷地内に介護付き有料老人ホームを建てた。住み慣れた街で、自分らしく最期まで。それが思い描いた理想図だった。



敷地内の介護付き有料老人ホームで自らピアノを弾く



46歳で亡くなった父の思いを引き継ぐ中村クリニック

東成区医師会内に設置する「在宅医療・地域連携相談支援室」はそんな理想を実現するために生まれた。同室を通じて基幹病院から退院する患者の情報を地域の医療機関へスムーズに提供できるようになった。

自宅療養では、かかりつけ医である在宅医や訪問看護師、ケアマネジャーらが職種の垣根を越えて相談を受け付け情報を共有。支援を行う看護師の資格を持つ在宅医療コーディネーターを設置するなど、病院と地域のかかりつけ医を結ぶパイプ役を置くことで、連携をスムーズにした。

連携において、大切にしてきたことがある。「医者と、看護師やケアマネジャーの立場を水平にしよう」と心がけてきました。医者が上からものを言う

のでは萎縮してしまいイエスマンになってしまうので、人は育たないんです」。理想の実現には余念がない。

満足する生き方、納得する最期を

借金をして敷地内に建てたという介護付き有料老人ホームも、そんな理想から生まれたものだ。医者が老人ホームを建てること自体、当時は珍しかったが、山奥や海辺などの僻地ではなく都会にあるという点でも画期的。住み慣れた地域で最期まで住み続けられる「エイジング・イン・プレイス」を体現した施設だった。

周辺には買い物する場所もあり、大阪中心部か

らも近い。寝たきりになった後も家族が面会に来やすい立地で、「元気に自由に出入りでき、安心して住み続けられる場所として始まったんです」。

目指すのは、従来の「病院完結型」ではない「地域完結型」の医療。「病院は死ぬために行く場所ではなく、病院から地域に戻ってもらい、弱ってきたらまた病院に行ってもらうキャッチボールを続ける」。それが、病院完結型を脱却した先にある地域完結型医療のイメージだ。

老人ホームでは食事をともにしたり、イベントと一緒に参加したり、入居者とは家族同様の関係を築いてきた。腹を割って納得のいく最期について話し合えるのは「かかりつけ医」と「かかりつけ患者」の深い信頼あってこそだ。

もっとも、入居1～2年目は設備への注文やちょっとした愚痴を聞くことが多い。ただ3年目にもなると「私はあと何年生きられるかしら?」「私も最期は

〇〇さんみたいにしてもらえますか?」と、次第に自分の話をしてくれるようになるという。

いわく「その人が考える満足する生き方と納得する最期を本人の口から聞けるというのは、老人ホームをつくった大きな目的の一つ」。最期まで住み切る“終の棲家”の役目を果たしている。

平成22年には地元商店街の空き店舗を改造し、高齢者や児童が交流できる場をつくるなど、活動の幅は医療分野にとどまらない。今ではすっかり地域の「慈父」のような存在だ。

「この仕事に終わりはありません。今はいかに継承していくかについても考えています」。在宅医療において先進的取り組みを進める東成区だが、まなざしはもっと先を見据えている。「亡くなった父の思いを絶やさず、顔の見える関係の中でより良い形で継承していけたら」。

(藤木祥平)



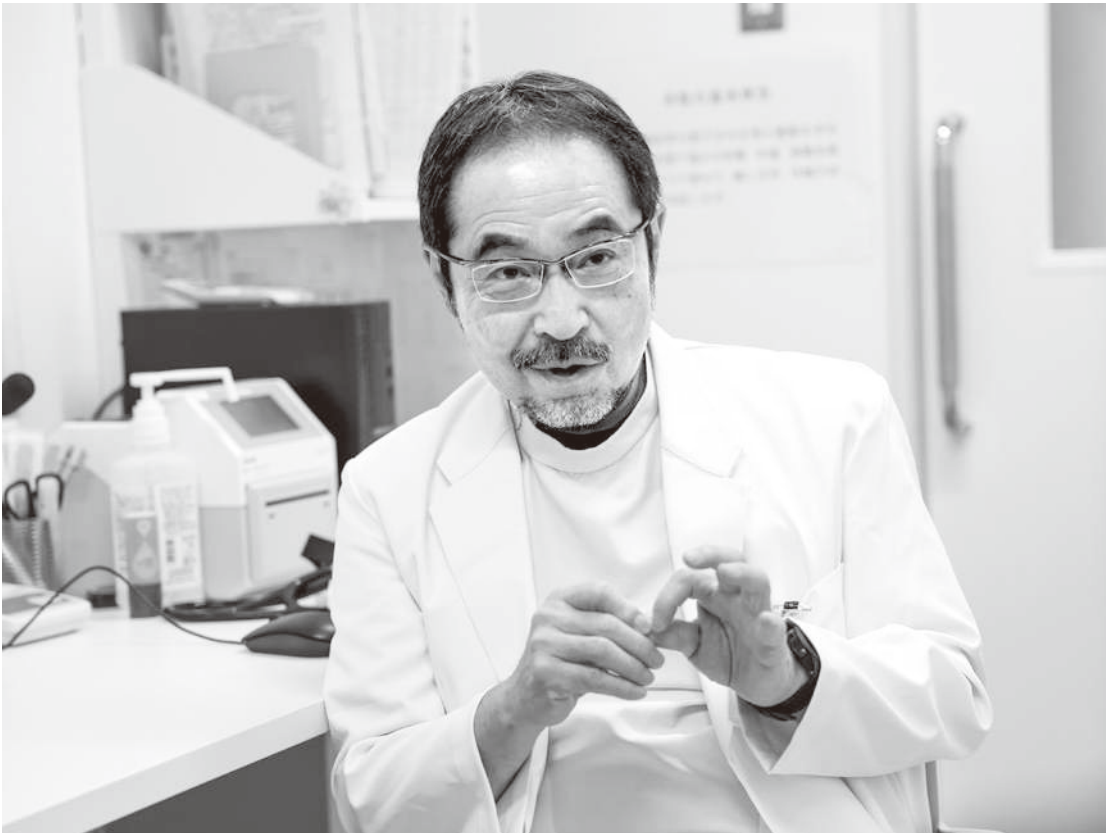
スタッフ一丸となり、「病院完結型」ではない「地域完結型」の医療を提供する

予防医療の推進で、地域の健康寿命を延伸

国保すさみ病院 顧問

高垣 有作

〈 和歌山県 〉



(彦野公太郎撮影)

たかがき・ゆうさく 国保すさみ病院顧問。昭和33年、和歌山県海南市生まれ。66歳。58年、同県立医大卒。愛媛県喜多医師会病院心臓血管外科部長、中谷病院長などを経て、平成18年1月から国保すさみ病院の副院長となり、20年から16年間、院長を務めた。令和6年4月から現職。

雄大な太平洋に面する「枯木灘」と呼ばれる海岸が続き、背後には「よみがえりの地」とされてきた熊野の山地が迫る和歌山県の南西部のすさみ町。約20年にわたって地域住民の医療に携わってきた。広く住民に予防医療の必要性を伝え理解を求めながら、住民や行政などとともに歩んできた。

赤ひげ大賞の受賞について「行政や病院スタッフに助けてもらい、何より町民のみなさんの協力があってできたこと。町全体の取り組みが評価されたことがうれしい」とほほえむ。

出身は県北部の海南市。活発な子供で、「外傷が絶えなかった」と笑う。公園のすべり台から落ちて、丸一日意識を失ったこともある。これらの体験が医師を目指すきっかけになったという。

同県立医科大学では心臓血管外科を専攻。経験を積む中で、「外科は、悪いところに直接手を加

えることで治療することができる。手術を頑張ることで患者さんが良くなるのは、非常にやりがいを感じていた」と話す。

手術しない理想の外科医

平成4年、国際協力事業団（現・国際協力機構：JICA）でエジプトのカイロ大に派遣され、小児心臓外科の技術指導を行うことになった。そこで目の当たりにしたのは、当時のエジプトには子供が心臓手術を受ける施設がなく、長ければ3年待たなければならない状況だった。

日々の手術や技術指導を続ける中、エジプトの子供たちが死亡する原因は下痢や肺炎の割合が高いことを知った。心臓手術の技術を高めることが必要だと感じる一方、少しでも多くの命を救うためには衛生環境を整えるなどの「予防」の重要性



高齢化率の高い地域だからこそ健康寿命の延伸は重要

を改めて認識した。

「手術のための技術も勉強も一生懸命してきたが、実際には、予防を行うなどして手術をしないように持っていくことが理想の外科医だと思うようになった」と語る。



広報や講演を通じて休日・時間外の不要不急の受診も減少した

その後、民間病院の病院長などを経て、平成18年、国保すさみ病院に赴任した。当時のすさみ町は人口約5千人で、「地域包括ケア」を実践するには理想的な規模とされていた。予防的な取り組みを行い結果を出すことで、一つのモデルをつくることのできるのではないかと考えた。

赴任当時、常勤医師は5人で日常診療と当直業務を行っていた。住民らにとっても「わが町の病院」として身近な存在だった。

「病院への敷居が低いことで、仕事が終わった夜間に、住民が不要不急の診察にどんどん来るがあった。病院の事情が分からず、悪気なく来てしまうような状況だった」

医療資源が限られる中、翌日の昼間の医療の質を落とし、昼間の患者に公平ではなくなってしまうと懸念し、町民への働きかけを始めた。

夜に町内の各集会所を回り、頭痛や腹痛といった症状ごとの自己診断方法などの講座を行い、夜間の不要不急の来院の自粛を呼びかけた。「まじめな話ばかりでは誰も聞いてくれないので、ギャグなんかも入れて印象に残るように工夫した」と話す。

また、町の広報誌に約100回にわたって病気についてのコラムを執筆し、日々の健康を意識してもらった。結果的に4年後には町内の休日・時間外の受診者数は多いときの約60%



医師搬送型の新型ドクターカーで紀州を走る

に減少したという。

「町民の協力で自分たちは非常に助けられた。診察の際にはお礼の声をかけてもらうこともあり、励みになった」

創意工夫の「ドクターカー」

救急医療では、平成21年に、全国で2番目に医師を運ぶための緊急車両「ドクターカー」を導入した。町の海岸線近くを走る国道42号はカーブが多いこともあり、交通事故が多発。車内に閉じ込められる事故が発生した際、現場での処置のために病院の車で向かって、緊急車両ではないので現場に到着できず、器材を担いで走るなどもどかしい経験もあったという。

こうした経緯から「ドクターカー」を導入。一般車に約24万円をかけて一部改造しただけの車両で、現場で使用するエコーなども新たに買いそろえず、訪問診療で使用するものを活用した。しかし、これまでに約30回出動し、現在も同じ車両が現役で活躍している。「ケチと思われるかもしれないが必要最小限の機能があればいい」と話す。

予防医療としては、肺炎球菌ワクチンの接種を国に先駆けて町独自で行ったことをはじめ、小中学生への喫煙防止教室、保育所から中学校までの校医を務めて一貫した健康管理を実施。これまでの取り組みの結果として、町民の健康寿命が延びるなど一定の成果が出てきた。診療科目に縛られない総合診療や、看取りを含めた在宅医療も行ってきた。

ローカル突き詰めグローバルに

太平洋に面する町では、南海トラフ巨大地震などによる津波への対策が進んでいる。同病院も令和5年11月に高台に移転した。建設にあたっては、災害だけでなくさまざまなことを想定して病院スタッフの意見も取り入れた。

玄関前には大きな庇を設け、多数の負傷者が運ばれてきた場合でもトリアージを行うことができる場所を確保。玄関ロビーの壁の内側には酸素を導入できる器材を設置し、初期治療に使えるようにした。また、数十年先を見越して、建物内を2つに分離して一方を別の用途に利用できるように構造になっている。

「医師の人生で病院の建設に携わることができる機会はまずない。将来を見据えて多くの考えや思いを込めた」と話す。

同町の人口は約3500人まで減少し、高齢化率も47%を超え、将来の日本の姿を先行しているともいわれる。限られた医療資源の中で効率的な健康づくりが課題となり、町が行ってきた一つ一つの取り組みには他の地域の将来のヒントがあると考えている。

「『ローカル』というのはネガティブな雰囲気があるが、突き詰めることで『グローバル』になると思っている。行ってきた町の取り組みの結果を示すことが将来の日本で役立つことにつながれば」と語った。

(小泉一敏)



限られた医療資源で手厚い診療体制を実現するスタッフ

開業約70年、地域の医療と福祉に貢献

間部病院 副院長

間部 正子

〈 熊本県 〉



(波井君夫撮影)

まべ・まさこ 医療法人美里みどり会理事、間部病院副院長。昭和3年、熊本市生まれ。97歳。25年、大阪女子高等医学専門学校(現・関西医大)卒業後、熊本大病院耳鼻咽喉科入局。32年、嫁ぎ先の間部医院(現・間部病院)で耳鼻咽喉科を開業。58年に間部病院副院長、平成19年から現職。現在も希望する患者の診療にあたる。

人口約9,000人の熊本県下益城郡美里町は、熊本市内から車で約1時間。面積の7割超を山林が占める農業と林業の町である。間部病院の間部正子医師（97）はこの町で68年間、現役で活躍する。「私は院外で目立った活動をしたわけでもありません。外来の診療をずっとやってただけなので…」と本人は控えめだが、地域の中核医療機関として長年にわたり医療資源の少ない熊本の山間地域

に尽くしてきた。

同病院は、内科・外科、リハビリテーション科、婦人科、皮膚科、小児科、耳鼻咽喉科、整形外科、呼吸器内科を併設するほか、人工透析や訪問看護、要介護の高齢患者を対象とした介護医療院も設置。文字通り地域住民の「ゆりかごから墓場まで」を担っている。

この地で医院を開業した義父や、夫の間部一彰

氏（故人）を内助で支えるとともに、自ら専門の耳鼻咽喉科だけでなく「内科も外科も、夜中の往診にも行きました。主人は産婦人科医でしたので、お産の助手もしましたよ」という。半世紀以上にわたり常に医療の現場で、患者と向き合ってきた。その根底にあるのは医師だった父・仁木正己氏の教えだ。

「女性とはいえ、ちゃんとメスを持って仕事をしなさい」——。終戦直前の昭和20年6月に大阪女子高等医学専門学校（現・関西医科大）に入学。寄宿舎に身を寄せ、戦後の食糧不足に悩まされながらも、父と同じ医師の道を目指した際に贈られた言葉だ。

尊敬する父の言葉を「女性であることに甘えず、男性医師と同じように医療の最前線で働きなさい」と受け止め、卒業後は耳鼻咽喉科の医



97歳の今も現役で活躍する



病院のスタッフと一丸になって地域医療を支える

師として熊本大学病院に入局した。医療の最前線で6年あまり勤務したところで転機が訪れた。家族ぐるみでつきあいのあった一彰氏との結婚だ。

山間地域に尽くす

長崎県の離島の保健所などで勤務した義父は、医療資源の少ない熊本の山間地域に尽くしたいとの思いから間部病院の前身となる「間部医院」をこの地に開業。その志を受け継いだ一彰氏に共感し、嫁ぎ先の間部医院で耳鼻咽喉科を開業したのは昭和32年6月のことだ。

「なにぶん、田舎ですから義父の指導の下、内科も外科の助手も、何でもしていました。夜中の急患に起こされたり、往診に行ったり。多いときは1日

に100人ぐらいは診ていましたね」と当時を振り返る。

農林業が基幹産業の同町は、ピーク時の昭和22年に約2万4千人の人口を抱え、高度経済成長の最中の35年も約2万2千人の住民が暮らしていた。46年の緑川ダム（同町）完成までの間は、工事関係者らで町もにぎわった。

このころは、町のメインストリートにあたる町筋沿いに小児科や内科、外科、眼科などの医院も軒をならべ、医師同士の交流も活発だったという。

医院の診療だけでなく、町内の幼稚園・小中学校などの学校医として、児童・生徒の健康診断や健康相談にも携わった。献身的な活動に「正子先生」「若奥さま」と町の人からも慕われた。「夏休みともなると、朝のラジオ体操に行く前の子供たち

が診察札を取りに来てましたよ。当時はまだ鼻垂れ小僧もたくさんいましたからね」と笑う。

一方で、自身も2人の男児に恵まれたが、日々の診療に追われ「自分はあまり子育てにも関われなかった。ご近所の皆さんや周囲の方々に育ててもらったようなものです」と打ち明ける。

ろくに趣味も持てないほど忙しい日々の中で、唯一の息抜きが菓子や料理づくりだった。「義父も主人も家に客を呼んではもてなすのが好きでした。私は菓子や料理をつくって地域の方々と交流していました。日々、忙しい生活でしたが、こうした時間がストレス解消になっていたのかもしれない」

地藏祭り（地藏盆）では、病院の駐車場を開放し、おでんやかき氷の露店で自ら住民に料理をふるまった。あの時代のにぎわいは忘れられない思い出だ。

地域に根差した医療を

ただ、高度経済成長が終わり昭和50年代に入ると、若者の流出により、地域の高齢化や人口減少が本格化しはじめた。かつては、多くの医院があった町筋の開業医らも次々と看板を下ろした。

地域医療の火を消さないためにはどうすればいいか。夫の一彰氏は昭和58年、医院を増床し80床の間部病院として地域に根差した医療を提供することを選択した。救急患者の受け入れや診療時間外の受診も増加し、開業当時にも勝る忙しさだった。

「元旦も朝から患者さんを診察して、本当に24時間、365日休む間もありませんでした。でも、それが医師として当たり前だと思っていましたので、大変だと思ったことはありませんよ」と当時を振り返る。



「内科も外科も、夜中の往診にも行き、お産の助手もしました」

健康管理から看取りまで

その後も平成6年には、一彰氏とともに特別養護老人ホームやデイサービスセンターを設立。高齢化が進む地域利用者が安心して老後を過ごせる体制を整え、訪問診療や訪問看護、高齢者の長期療養にも対応する介護医療院の併設など、健康管理から看取りまで地域の医療・福祉を支えている。

また、平成8年からは実習病院として准看護師の教育にも携わり、多くの学生を受け入れ、自らも熱意をもって指導にあたった。「学生さんが、成長していく様子を見ると、うれしかったですね。やはり若い人と接すると、こちらも背筋が伸びるような感

じがしますよね」と、母親のようなまなざしで看護人材の育成に携わってきた。

現在は院長を務める長男の間部訓章夫妻や孫が、医師として間部病院を支える。ただ、古くからの住民は「正子先生に診てもらいたい」と希望する患者も少なくない。97歳となった今も白衣に袖を通し、患者に向き合う。

「私ももう年なので、最新の医療は分かりません。だけど、何十年も診てきた（地域の）患者さんの体のことは、何でも分かりますよ」

昭和、平成、令和と地域住民の健康に身を尽くした静かな自負が垣間見えた。

（内田博文）



24時間、365日体制で対応してきた

赤ひげ功労賞

受賞者

(順列は北から)

北海道



加藤 輝夫 (75)

市立函館南茅部病院
院長

秋田県



小笠原 真澄 (68)

大湯リハビリ温泉病院
院長

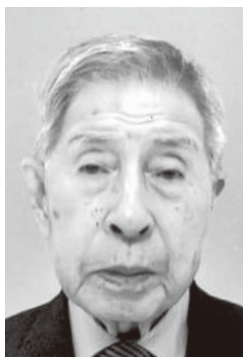
群馬県



高玉 真光 (94)

老年病研究所附属病院
理事長

東京都



小暮 堅三 (92)

小暮医院
名誉院長

神奈川県



土肥 直樹 (61)

相模原市
国民健康保険内郷診療所
所長

富山県



中村 國雄 (83)

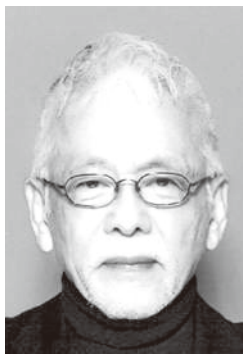
中村記念病院
理事長・院長



静岡県

紀平 章代 (83)

紀平クリニック
副院長



京都府

渡辺 康介 (76)

渡辺西賀茂診療所
理事長



鳥取県

武地 幹夫 (65)

江府町国民健康保険
江尾診療所
所長



広島県

土手 慶五 (67)

安佐医師会病院
病院長



徳島県

吉田 修 (66)

さくら診療所
勤務医



愛媛県

今井 洋子 (89)

奥島病院
非常勤医



大分県

麻生 宏 (80)

麻生小児科医院
理事長



鹿児島県

徳留 一博 (81)

ひなたやま
日当山温泉
東洋医学クリニック
理事長・院長

(年齢は2025年2月21日現在)

選考経過報告



日本医師会 常任理事

黒瀬 巖

日本医師会常任理事の黒瀬巖と申します。

赤ひげ大賞並びに赤ひげ功労賞受賞者の皆様、このたびは誠におめでとうございます。

第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」の選考の経過をご説明させていただきます。

第13回「日本医師会 赤ひげ大賞」は、昨年5月1日、日本医師会より都道府県医師会宛てに推薦依頼文書を発出し、ご推薦を頂きました。

選考に当たりましては、先ほどご紹介のありました選考委員の皆さんと共に「候補者推薦書」による事前審査を行い、その結果を基に、11月7日、日本医師会館において選考会を開催いたしました。その中で、「赤ひげ大賞」の受賞者5名ならびに「赤ひげ功労賞」の受賞者14名を決定し、本年1月8日、日本医師会の記者会見で今回の結果を公表し、本日の表彰式を迎えるに至りました。

受賞された先生方は、長年にわたり、地域住民の健康確保に親身に取り組んでこられた方々ばかりであり、選考には困難を伴いましたが、受賞者には本賞にふさわしい方々を選考できたと考えております。

コロナ禍や震災により、地域に根差して医療を行うかかりつけ医の存在の重要性が再認識されています。

本賞が、各地域の先生方の励みになり、地域医療の更なる充実や後進の育成へとつながることを願っております。

以上、経過のご報告とさせていただきます。

ありがとうございました。

2025年度

第14回「日本医師会 赤ひげ大賞」

● 推薦概要 ●

日本医師会

赤ひげ大賞

- | | |
|-------|--|
| 主 催 | 日本医師会、産経新聞社 |
| 後 援 | 厚生労働省 |
| 協 力 | 都道府県医師会 |
| 特別協賛 | 太陽生命保険 |
| 対 象 者 | 病を診るだけでなく、地域に根付き、その地域のかかりつけ医として、生命の誕生から看取りまで、さまざまな場面で住民の疾病予防や健康の保持増進に努めている医師。日本医師会及び都道府県医師会の会員で現役の医師（ただし、現職の日本医師会・都道府県医師会役員は除く）。 |
| 推薦方法 | 本賞受賞にふさわしいと思われる方1名を各都道府県医師会会長が推薦 |
| 受賞発表 | 産経新聞紙上 |
| 選 考 | 日本医師会と産経新聞社の主催者側委員に第三者を交えた選考委員会において選定 |
| 賞状と副賞 | 賞状、記念盾及び賞金等 |

これからずっと、
わたしらしく。



人生100歳時代。

元気に長生きしながら、自分らしく生きていく。

それは誰もが望む理想の未来。

太陽生命の保険組曲Best MYWAYは、

そんなひとりひとりの生き方を応援していきます。

あなたの人生という道に、もっともっと寄り添えるように。

太陽生命の新たな挑戦の道のりもまた、

ここから始まります。

あなたの人生にベストな安心を。

太陽生命の保険組曲Bestに新シリーズ、登場。



元気!長生き!  太陽生命

資料請求は **0120-264-333**
資料のご請求は自動音声で24時間受付しております。



太陽生命ダイレクト | Q



さあ、保険の新次元へ。

T&D 保険グループ